

有島武郎研究

—「詩への逸脱」をめぐる(一)—

宮野光男

有島武郎が、個人雑誌「泉」に、「詩への逸脱」という短文を掲げたのは、大正十二年四月のことである。これは、かねてから小説や戯曲への不満をかこち、詩への憧憬をもっていた有島が、△音楽につぐ最高位の芸術表現▽である△詩▽の世界への飛躍を決断した、宣言文ともいふべきものである。

ところで、その、飛躍への決断を語る部分、

或る機縁が私を促し立てた。私は前後を忘れて私を詩の形に铸込まうとするに至つた。どんなものが生れ出るか、私自身と雖もそれを知らない。私は或は私の参詣すべからざる聖堂を窺つてゐるのかも知れない。然し私にはもう凡てが已むを得ない。長くせきとめてゐた水が溢れたのだから。

は、△これから独りで出懸けます。左様なら。▽という挨拶の言葉を残して、△因襲▽と△伝説▽とに束縛された△ごまかし▽の自分

有島武郎研究 —「詩への逸脱」をめぐる(一)—

の生活から、△自分の眼で自分を見▽る、△自己に立ち帰▽つた生活へと、自己転換を意図したときの決意である。「『リビングストーン』第四版の序」(大8・3)の一節、△私は凡てを擲つて子供の時から唯一つの欲求だつた芸術の世界に飛び込んだ。私のこれからの生活は私の芸術を、即ち私の自己を完成する為めに用ゐられねばならぬ。芸術は私の餘裕が考へ出す遊戯ではもうなくなつた。それは私の生活そのものだ。▽というものと、その発想において、酷似していることを知ることができる。ただ一つ異つてゐるのは、大正八年の時点での決意の内容が、芸術一般への飛躍であり、その内容は、必然的に、小説や戯曲に代表される散文の世界を意味していたのに対して、大正十二年の「詩への逸脱」での宣言の内容は、△詩▽の世界への飛躍を意味しているところである。

この相違が、たんなる形式の問題にとどまらず、本質的な変化であることに気づいたのは、秋田雨雀である。雨雀は、有島を追憶する文章の中で、

誰でも有島武郎君の作物を読んでゐた人々には「詩への逸脱」

は可なりの驚きを与へたであらう。ここでは彼の芸術的心境は実生活と全く引き離すことができなくなつてゐるばかりではなく、驚くべき変化が彼の芸術観の上に表はれて來てゐる。描写から表現の世界へ。彼の短い主観詩の發表は、この芸術上の變化をよく語つてゐる。「一二つの手」(追憶手記)、「泉」終刊
有島武郎記念号、大12・8」

と述べているが、これは、有島の文学にみられる△虚無思想▽と、具体的な死とを直接的に結びつけるところの、結果論としての△逸脱▽論が多い中であつて、有島の可能性追究の文脈において見出される新しい決意と、それにもなう微妙な變化を、△詩▽への、△象徴に於て極まる▽△表現▽「△詩への逸脱」△への期待において読み取つてゐるという意味で、一つのすぐれた「詩への逸脱」論といふことができるのである。事実、すでに「運命の訴へ」論⁴¹でみてきたように、△旧衣を脱▽して、△新しい衣裳▽を着ようとする有島が、小説、戯曲、つまり散文の世界での、それへの試みと、その結果としての挫折とを見取つた上での、再度の決意表明としての「詩への逸脱」なのだから、有島の△実生活に全く引き離すことができなくなつた▽、△生活そのもの▽であるところの詩的表現への期待は、本質において、△第三の開眼願望▽にも通じる根源的な願として位置づけることができるのではないかと思われるものだけに、
雨雀の、この指摘は、重要な意味を持つてゐるのである。

ところで、△芸術の上▽の△驚くべき変化▽である△詩▽への期待を、有島が、あえて△逸脱▽と云わなければならなかつたのはな

ぜであろうか。△長くせきとめていた水が溢れた▽のような、いわば内的必然性に支えられた願であるにもかかわらず、負の響きをもつた△逸脱▽という言葉によつて表現されている有島の内面性の特色を明らかにすることが、あるいは「瞳なき眼」、「詩への逸脱」にかけた、有島の△新しい衣裳▽への期待の特色解明の、一つの可能性発見の糸口になるようにも思われるのである。

いづれにしても、有島の△詩▽への期待の中に、△新しい衣裳▽への可能性追究の姿勢を見ることができるか否かについて考えるためには、一方では、散文において試みられた人間追究の、内面的限界状況の解明と、方法としての散文形式に対する否定的認識の分析・解明も一つの方法であろうが、他方、その△詩▽と△詩論▽の考察が、有効な方法であろう。そのためには、「瞳なき眼」と「詩への逸脱」の解釈が、まず、さしあつた問題として取り上げられるところであろうが、

私も亦長い間この懐^{あこ}がれを持つてゐた。説明的であり理知的である小説や戯曲によつて自分を表現するのでは如何しても物足りない衷心の要求を持つてゐた。

という反省にみられるように、有島の懂れの内容である詩—△詩▽と△詩論▽の變化そのものを、「瞳なき眼」、「詩への逸脱」に至るまでの過程において、つまり、詩への関心と、詩に託された内面性の示現の通時的變化との諸相の解明によつて考察することが、遠まわりではあるけれども、有島の△詩▽に対してなされてゐる期待

の内容を知るための、より有効な方法であろう。

二

人は自ら知らずして人類を恋してゐる。彼の魂は直接に人類に對して自己を表現せんと悶えてゐる、かくて彼は彼自身を詩に於て象徴する。

私も亦長い間この懐がれを持つてゐた。「〔詩への逸脱〕」

△象徴にまで灼熱する力も才能もないのを思つて今まで黙してゐた▽のであるが、たしかに、有島にとって△詩▽は、長い間憧憬してきた△魂の象徴▽であつた。

* * *

一人の学友が、シラーの詩を吟むのを聞いて、△嗚呼君一年級の学生として詩を暗記すること此の如きに至るは勉強の篤きによらずんば焉ぞ此に至らん▽という感嘆の声を發したのは、有島が札幌農学校に入學した翌年、明治三十年六月十日のことである。多分に、△勉強▽に力点のおかれた感嘆ではあるが、あるいはこれが、有島の未だ知らざる詩の世界への開眼の時であつたかとも思われるのである。

有島の見神体験の結果生じた精神構造の変化の一つを、自然觀の變化として捉えることができるという指摘をしてすでに久しいが、有島が自然を通して神を見ることを知ったとき、詩は、有島にとつ

有島武郎研究 — 「詩への逸脱」をめぐる —

て、神を見るための、一種の覗き窓のようなものになつたのである。

自然は神の被服なりと云はん。我深く自然に学ばずや。私の汚き、低き、卑しき心は自然によりて著しく潔められ、而して高尚となさしめらるゝなり。世に若し自然の美なるものが皆無なりとせば、嗚呼人の生涯は如何に苦痛なりけん。人に自然に接するの詩眼なかりせば、如何に不幸なるらん。我は此大なる恩恵を感ずる事能はず、神を無にする人あるを悲しむなり。〔日記、明32・4・6〕

△自然を透して神を知る事を得ば余が能事は終れり▽〔同、8・17〕とする有島にとって、△自然に接するの詩眼▽とは、△真に神に接する▽〔同、4・4〕ための△心眼▽〔同、3・16〕の謂である。カーライルや、ワーズワスなどによつて開かれた△詩眼▽を通して、有島は、△眼を挙げて星と月とを見—真に天国の遠からざるを覺▽〔同、12・17〕え、その思いを、自然をうたう詩に託してゐるのである。

勿論、△詩眼▽開眼が、広い意味での詩的心情、詩的狀況への開眼でもあつたことは、例えば、△道を間違へて無名寺に行つた時などは実に詩的だつた。▽〔同、明34・10・9〕とか、△「一葉全集」の「たけくらべ」を読む。〔中略〕若し彼女に年を假すあらば、彼女は確かに明治文壇を装ふべき詩星なり。▽〔同、明36・2・14〕という発言、あるいはまた、聖書に描かれている、ベタニヤのマリアによる、キリストの葬りの準備の場面を言い表わすのに、△嗚

呼、何等の優しき美しき行爲なるぞ。是れ直ちに、一個の詩にあら
ずや。▽〔同、明34・11・24〕と、彼女の詩的女性であることを強
調しているところなどからも明らかである。

すなわち、この時期の有島にとっては、それが狭義であれ、広義
であれ、△*imagination* の翼に乗じて天外の聖境に遊ぶ詩人の快意
▽〔同、明32・10・1〕への強い憧れは、△君を見る事明▽なる△
透徹の眼▽〔同〕を持つことへの憧れであり、自らの内に、△余に
詩人の心あるを自覚▽〔同、明33・1・24〕することを通して、一
方では△心中には莫大なる空虚を▽〔同、4・21〕覚えながら、他
方では△基督の愛を真に解せん▽〔同、5・25〕ことを願いつつ、
△自然によりて其 *perfectness* を示しつつある―神▽〔同、12・
31〕への思いを高めていたのである。

有島の詩心の自覚は、当然△詩▽そのものへの関心を強め、詩作
への思いを増し加えているのである。先にも述べたように、それは
自然に託された、創造主の讚美であり、被造物としての人間の喜び
と、それにもかかわらず罪なる存在としての自己認識をせざるを得
ない者であることの悲しみの表出が、その主たる内容である。日記
には、このあたりから、英詩の引用、その試訳、習作が記されるよ
うになっているが、これらを見ても、有島の、いわゆる狭い意味で
の詩への憧れの原形が、この時期に形成され、精神構造の基底部に
胚胎したことを知ることができる。^(註4)

伊東憲は、この時期に、△武郎の詩腸は益々高まり、―この当時
出た島崎藤村の「若菜集」土井晩翠の「天地有情」薄田泣菫の「暮

笛集」又は雑誌「明星」等は、否その詩的な雰囲気は、多感なる武郎
の詩腸に、何等かの刺戟を与へずには置かなかつたと思ふ？▽とい
っているが、この指摘は、△「近松傑作集」、芭蕉、「一葉全集」
若松賤子の「忘れがたみ」、与謝野晶子の「みだれ髪」、永野武三
郎の「用無遺稿」―▽などによって、有島が、△浪漫的自我の詩的
感情に深い感動をうけていた。―武郎は宗教的・浪漫的な詩情を愛
し、このころの詩作の断片に若い彼の性情をうかがえる▽という瀬
沼氏の指摘によってより明確にされた、有島の内部にある詩的想像
力―芸術への未分化の感情、と、宗教的感情の、いわば接点として
の△詩▽が、有島の精神構造解明の、一つの鍵であることを云いあ
せているのである。有島の、△「藤村詩集」を読んだ。彼は実に一
個の詩人たるに愧ぢぬ。一種清婉の想が何となく沈思を齎すので
ある。ハインを優しくし *Wordsworth* を狭くしたとも云ふべき
であらうか。▽〔日記、明36・2・23〕という藤村評は、その一つ
の顕現であらう。

このような状況の中で、有島にとって、とくに、△詩眼▽をもつ
て人生に対し、△詩▽を通して信仰告白をしている永野武三郎の詩
文集「用無遺稿」は、大きな、忘れ得ぬ存在の一つだったのであ
らう。有島の、詩への憧憬の具体的な事実の一つとして、その傾倒ぶ
りと、特色について、すでになされている紹介・研究をふまえなが
ら、いささか述べてみたいと思う。

日本近代詩史において、いわゆる詩壇に属さなかったために、その存在すら認められずに、歴史の片隅に放置され、一部の人々に愛されただけで埋没してしまった詩人は多いが、有島が生涯を通じて愛したキリスト教詩人永野武三郎も、その中の一人である。

有島の、「用無遺稿」への傾倒については、すでに伊東憲もふれているが、実際に、筆者永野武三郎の略歴紹介、詩文集としての内容紹介というよりも、有島所持本「用無遺稿」の存在の事実そのものが明らかにされたのは、有島生馬の「武郎と用無詩集」が、有島との関連においてなされた最初のものである。それによって、武三郎、「用無遺稿」についてのアウト・ラインを知ることができたわけであるが、とくに有島が△詩意をかりた自筆の挿畫六枚▽を挿入している事実がふれて、△武郎の空想が甚だ容易に詩文と絵畫の境界を混同結合せしめた面白い一例でもあらうか。▽とされているところは有島の芸術観—文学と絵画との相互関係に関わる—上の特色をよく云いあてたものということができよう。

△武郎がいついかなる因縁で、用無詩集を手に入れたかその経路は不明であるが▽という部分を解明し、あわせて版元に書き送った購読依頼の書簡〔全集未収録〕を紹介されたのが、瀬沼茂樹氏である。^(註8)

有島は、武三郎が、寄宿舎の自室の壁に掲げていたという、△主耶蘇ここにいまし／すべての事をき／すべての行を見／すべてのおもひを／わきまへたまふ▽や、△Here is the patience and faith of the Saint△という△警語▽〔「用無遺稿」序〕故永野武三郎君〕は無署名であるが、これとは同じ文が、武三郎の友人稲

有島武郎研究 — 「詩への逸脱」をめぐる —

垣陽一郎によって書かれているので、これも多分稲垣文であらう。^(註9)

を、△我が胸に刻むべき Hoto とせん▽といい、△我も幸にして涙の中にも実行の生涯を送り、其実行の moire を堅く神に置かんとするの決心をなし得るに至▽〔日記、明34・4・21〕〕といったように、まず第一に、信仰の先輩として、その信仰を貫き通した生涯を追慕し、自らの信仰生活の規範としようとしているのである。とくに、武三郎の、△勇氣▽、△忍耐▽、△愛の心▽をもって実行した生活は、実践を重んじる信仰を教えられた有島にとってはリビングストーンに対する畏敬の念と同様の思いをもって受けとめられていたのであらう。そのことはすでに指摘したところであるが、加えて、武三郎の詩に対してはらわれている関心の強さも、一つの特色としてとり上げることができよう。なかでも、「乱曲」、「絶望憤」、「退台のはしがき」と題された詩篇などは、有島が、△誠に天来の声、読めば読む程意味濃くして我心の奥底に烈しく絃の震ふを覚ゆるなり。▽〔日記、明36・2・28〕〕などと称讃し、生馬の紹介にあつた△挿畫▽も、これからの詩篇に付されているのであつて、いかに心惹かれていたかを知ることができるのである。

有島が、なぜ、永野武三郎と、その詩に惹かれていたのかといえば、それは、勿論、信仰者の規範として、その形象化された姿である信仰詩としてすぐれたものだったからにちがいないのであるが、△用無氏の思想何ぞ我に似たるの甚しき。彼は殆ど我が心と言ふものゝ如し。詩人の普き同情此に到りて尊きかな。良き朋を得ぬ。復淋しき事あらじ。▽〔同、2・26〕〕という思いに見られるように、

思想の等質性をあげることができるのである。先にも述べたように
勿論、キリスト教信仰という意味での等質性を、この時期での第一
の特色としてあげることができるのであるが、そのことをも含めて
△思想▽、△我が心▽という言葉が示しているように、文学作品と
しての詩への共感というよりも、むしろ、詩のかたちをかりて表出
された魂の姿に対して、共感と同情とをもって心惹かれていたので
はないだろうか。先にもみたように、有島の△詩▽への憧憬が、い
わゆる詩人ならざる詩的存在への憧憬をも、その内容としていたと
いうことが、その一つの顕現でもあらうが、たとえば日記にみられ
る一種の詩論にも、その傾向がみられるのである。

文学の中如何なる形式を有するもの其立脚の堅固を致すべき
か。余は思ふ、必ず純粹單一なる抒情詩なりと。嗚呼然り、何
物をか捕へんとする人の心は幾度の彷徨をなしてしかも遂に己
が心其物に帰り来るなり。「中略」人、哀なる人を見んとする
時彼は初めて人たるなり。而して此人を慰藉するものは何ぞ
や。人を眠らしむる高樓か、人を恥無からしむる錦食か、人を
饑なからしむる珍味か。然らず、然らず、唯人其物のみ。人の
悶ゆる心に応じ得るものは、唯人の悟れる心のみ。劇詩或は人
の慰藉たるを得べし。哀なる人の慰藉は、唯これを抒情詩に求
めんのみ。「日記、明36・3・20」

ここにいう抒情詩が、たんなる感傷的抒情詩の定義を越えたもの
であることは云うまでもないことであらう。それは、八年甫めて壯

にして人生の第一疑問に指を染むるに到りし余の上に、愈々濃くな
り行く―影―、余が哀なる人の光を被ひて、余をして暗黒の中に満
足せしめんとする―影▽〔同、6・?〕に替える有島の心を映し出
す詩、なのである。勿論、△光とはは夕なき 旭に野辺の花さか
え／風おだやかに吹く所 其処に癡^い瘵^いの力あり▽〔Longing（熱慕）
重訳―日記、明33・5・17〕とうたわれているように、影を影た
らしめる光への憧憬も、その内容でありえよう。しかし、それは、
あくまでも、△さりながら見よ我が前に 横たふ河はさかまきて／
嵐木枯吹き落つる 汀に獨り我れ立てば／波ものすこく寄せかへり
言ひ甲斐なくも心おくるる▽〔同〕有島の心を映し出さざるを得な
いものなのである。

この当時の有島の発想からすれば、「Longing」が、△堅く信ぜ
よ敢てせよ／唯ためらはぬ確信の 蔭こそ安き住家なれ／光栄あま
ねき奇跡の地 奇跡に據らぬ人に見られじ▽と結ばれていることに
意味があるのであらう。武三郎の詩が、その意味において、神の栄
光を讚美し、それに預る喜びの詩の一面をもっていることも事実な
のである。むしろ、表面的には、それが用無詩が、一面において宗
教詩たるゆえんでもある。桜井絢子氏の指摘にもあるように、△最
も彼の心を惹きつけたものは用無自身の思想、生き方そのもの▽で
あり、しかもそれは、△神への服従こそ人間の眞の独立（人生の帰
趣 明33）であるとする厚い信仰を抱いていた時期に知った用無の
熱心な信仰▽と、△夢見ること貴しとした彼にとつて用無は夢を
失わざる人として憧憬の眼をもって迎え▽うるものを内容とするの
であらう。

しかし、たとえば、 \wedge うつろへばとて なにか とがめん／こころがはり すればこそ ひとゝは いふなれ \vee 「 \wedge 乱曲」(上)」という、否定的人間観、あるいは、 \wedge うつし世の あらしに／糸をたえ わか琴かなでなす しらべの／あやもなく みだるゝ／いは たえぬ わがしらべ みだれぬ／いは たえぬ たえし このひとすぢ \vee 「 \wedge 断緒を悼む」にみられる絶望感、神の前にひとり立つ人間の孤独と限界状況への、苦悩に満ちた、深い洞察の結果知り得た \wedge 衷なる人 \vee の真実の姿なのである。有島が好んだ用根のものであることを知ることができるのである。有島が好んだ用無詩のうち、とくに挿絵を付した六篇「明らかに破棄したと思われる挿絵がもう二枚あるが」が、いずれも、何らかの意味で、人間の内面的苦悩を表わしたものであることから、武三郎に対する有島の興味は、むしろ、彼の否定的人間観にあったのではないかと思われるのである。

「絶望償」における \wedge さとり \vee について、桜井氏は、第一聯の \wedge さとりなきけもの \vee の \wedge さとり \vee (人間としての自覚)とは異なり、 \wedge 無知 \vee と対比されている「中略」自力によるさとりという思想 \vee の顕現であるとされているが、少くとも、この場合、内面的苦悩、たとえば絶望感とか孤独感といったものをふまえた \wedge さとり \vee — \wedge 人の心の悶ゆる心に応じ得る—人の悟れる心 \vee でなくては、 \wedge わがのぞみ たえず／みちかひの うせざる あひだ なやみにすわり うれるひに をらん われ無知にして さとりなく 全能者の みまへに／むなしきより／かろし／されど その あはれみは おほいなれば／われを たすけたまふ／こともあるべし \vee 「 \wedge

絶望償」)という武三郎の信仰への共感と同情も、虚しいものになつてしまふのである。

桜井氏の指摘にあるように、有島の作品には、武三郎は二度登場する。一度は、「半日」(「明42・2」)の中に、 \wedge 若くして死んだ—基督教青年の遺稿 \vee で、有島の傍を多分に持っている \wedge 相島 \vee が、 \wedge 学校に居た時は夢中で愛した本 \vee として、 \wedge 黒皮の表装中には相島が自分で描いた挿絵が入れてあつて、詩や文には赤青の線が引き散らしている \vee という説明は、 \wedge 相島 \vee の、「用無遺稿」に対する姿勢、生活における位置づけなどとともに、現実の「用無遺稿」そのまゝの姿であり、たしかに桜井氏のいわれるように \wedge 若き日の純粹な信仰の象徴 \vee としての一面を伝えているところである。しかし、有島がこの遺稿集を、積極的に評価し、作品の中で一つの位置を与えているのは、たんなる過去礼賛、つまり、 \wedge 若き日の熱烈な一途な信仰をなつかしむ気持 \vee からだけではなく、むしろ、キリスト教離反後の有島の間人観の中でも充分に共感しうる否定的要素の存在を忘れることはできないものをその本質にもっているからである。「半日」では、 \wedge 是れは僕が嘗て愛読したんだが(「後略」 \vee という \wedge 相島 \vee の言葉が象徴しているように、信仰者永野武三郎という意味において、過去の存在と考えられているような、 \wedge 相島 \vee の信仰の動搖期にあることを表わしているのであるが、他方、詩がひろい読みみされているところが、「乱曲」の一部分であることは、この詩にうたい出されている人間の憂心への絶望的諦念が印象的であるだけに、一方では \wedge 相島 \vee と \wedge 井田 \vee との関係の断絶を思わせ、さらには、 \wedge 此世にて又遇ふべきか—遇はざるか／此世にて又遇ふ

事のなかれかし。／又遇ふとは恨の井戸の深く掘りなして／若水くむなりVによって、人間の根本的な関係の断絶をもあわせて思わせていることを読みとることができるのである。かかる否定的人間観は、信仰の世界では、関係の回復の前提としての意味を持ちうるわけであるが、キリスト教信仰への疑惑を感じ始めた者にとっては、それは、もはや、回復不可能の限界性の認識の前提以外のものではないはずである。換言すれば、否定的人間存在であることの証明書としての役割を果たすものとして位置づけられるのである。

『用無遺稿』の、否定的人間観を媒介とする積極的位置づけは、『三部曲』の、第一番目の戯曲、「大洪水の前」の中で、ハヤペテVの恋人、滅ぶべき存在として運命づけられているカイン族の娘ハナアマVの歌う歌として、短詩「断緒を悼む」が引用されていることから明らかである。有島所持本の中にみられる、この詩に対する書き入れは、おそらく有島の感想であろうが、ハ絃絶えし憂然たる声ありく／と耳をつくVという言葉の中には、一種の絶望感が、その基盤にあることを示しているのではないだろうか。この戯曲が大正五年一月、「白樺」に未定稿として発表されたとき、有島は、末尾に、ハ第二場のナアマの歌は永野用無子の歌集から抜いたので。故永野氏は生前嘗て会はなかつた人ですが僕はその人を愛しました。僕はこんな自分勝手な処置が氏の霊によりて許される事を信ずる者です。Vと付記しているが、先の書き入れと、この付記とを合せて考えてみると、有島は、この詩を、おそらく絶望の歌としてナアマに歌わせているように思われるのである。ハ自分勝手な処置Vとは、著作権所有者の許諾を得なかつたことを意味しているのだ

あろうが、おそらく、内容に関わる解釈上の処置への配慮をも意味しているであろう。未定稿と定稿との間にみられるナアマ像の差が、彼女の罪意識—人間論的にいえば絶望感—の内面化の方向は異ってはいないが、認識の基盤としての否定的人間観は、この詩の引用によって、みごとに象徴されていることができるのである。

なぜなら、ハ絃絶えし憂然たる声Vは、ハナアマVの、天からも人からも疎外された人間としての、孤独な姿を憂える声への共感に他ならないからである。この武三郎の詩にみられる、人間が信仰に向う前提としての否定的状況認識を、人間の中に可能性を求める前提として作品の中に生かすということも、新しい愛の論理を求める前提としてそうすることも、有島自身の反省としては、意識的に信仰の次元を離れての可能性追究の根拠にしているという意味で、それは、たしかにハ勝手な処置Vであるにちがいない。しかし、有島が生涯、友として愛した武三郎の詩をハナアマVに歌わせているというところに、彼女に託した詩的女性への期待の大きさを思わせるところでもある。このところにも、この「断緒を悼む」に象徴されている、この詩集の一側面である絶望感への、有島の強い共感と相俟って、『用無遺稿』を、永く座右の書たらしめている一つの原因を見ることができるのであって、有島における永野武三郎の『用無遺稿』は、生涯の書であったということができるのである。^(註13)

四

有島の詩論「詩への逸脱」考察の前提としてのハ詩Vとハ詩論V

追究のために、その生活の中で出会った詩人との関係を、通時的に捉えていくとするならば、つぎにとりあげるべき詩人は、当然米國留學中に本質的な意味での出会いを体験した、ホイットマンとダンテの二詩人であろう。キリスト教信仰を一種の桎梏として、換言すれば人間疎外をもたらすものとして受けとめざるをえなかった当時の有島にとって、ダンテは、 Δ 地獄にある一靈魂 ∇ 〔日記、明37・8・30〕の存在を、有島に認識させる一つの契機であったことその恐怖からの解放を、 Δ 大なる魂 ∇ 〔足助素一宛書簡、大2・10・28〕との合一に求めることの可能性を教えたのがホイットマンであったことなどは、米國留學の、有島の精神史における重要なポイントの一つとして取り上げられなければならないことなのである。しかし、ホイットマンのいわゆる Δ 魂 ∇ 願望が、有島の精神史にあつて、たんなる反キリスト教信仰の顕現としてとらえられることだけではなく、むしろ、ホイットマンにおける逆説— Δ ホイットマンが、信じえたアメリカの可能性を現実の像のように提出したというのは通り一遍な読み方だ。 ∇ にも通じる、 Δ 大なる魂 ∇ への信仰が、キリスト教信仰の一変形として捉えうる可能性を、当時の有島の願いの中に見出すことができるのではないかと思われるのである。それは、米國留學から帰ってきた有島の、年代からいえば明治四〇年から四三年にかけての、キリスト教信仰に対する動搖期における、一女性キリスト教詩人座古愛子との出会いにおいて明らかにすることができるよう思われるのである。

有島武郎研究 — 「詩への逸脱」をめぐる(一) —

今夕は、座古愛子の「伏屋の曙」を読んで、甚だ有益に尊く過した。時々、涙が眼に溢れて来た。彼女は、詩人の心情もつてゐる。彼女の眼識は鋭く、眼の当りに見るかの如く明かに、諸者にその場面を描き出さしめる。彼女のこの世ならぬ顔付も亦、余を魅する事多く、為に余は彼女と交はりを結び、互に友人にならうと決心した。余は彼女の中に、理想の女性を見出したやうに思はれる。頑固に近い程の堅固な意志を持ち、而もそれが憐愍、同情の感情によつて容易に而も美しく柔らげられなごやかになる女性—余はかうした類の女性が好きた。〔日記明41・3・20、原文英文〕

笹淵友一氏は、有島の Δ 座古愛子に対する異常なまでの感動は有島が既に信仰を失つていたと自らいっている時代のものだけに、示唆的である。 ∇ と述べておられるが、たしかに、有島にとって、座古愛子という女性は、永野武三郎と同様、有島の内面性を追究するための、一つの手がかりを与える存在だったようである。

先に見られるような共感を記した有島は、以後、 Δ 一友人としていただきたいと云ふ手紙を出し ∇ 〔同、3・27〕、許諾の返書を得て、 Δ 言語に絶する喜び ∇ 〔同、4・7〕を感じたこと、さらには彼女の第二の著書「続伏屋の曙」〔明41・6、警醒社〕を読んでは、同、7・15〕ことなどを日記に記しており、その傾倒ぶりは、たしかに Δ 異常 ∇ である。しかし、ここで気がつくことは、有島のこの Δ 異常なまでの感動 ∇ ぶりだが、これまでに見てきたような、いわゆる少女憧憬という言葉で表わすことができるようなものとは、いささか趣を異にするものだということである。少くとも、この Δ

理想の女性V像の中には、たとえば、△古藤Vをして、△「明白に云ふと僕はあゝ云ふ人は一番嫌ひだけれども、同時に又一番索き付けられる」△後略V女性だと云わしめている、「或る女」の△菓子Vの姿は見あたらない。むしろ、それとは対称的な女性、△人の同情をあてにして―傷ける獣の様に、到る処に癒しの泉を求め歩くV〔日記、明41・4・7〕有島を、豊かな感受性をもって受けとめ、やさしく、愛の要求に応えることのできる、純粋な、慈愛に満ちた、円満な、そのくせ一種の透明さをもった女性への期待がかなえられる喜びが語られているのである。有島は、彼女の、このような存在であることを、△詩人の心情Vをもった女性と云い表わしているが、これは、いわゆる詩人としての魅力をこえた、あくまでも、その詩的存在としてのすばらしさに心惹かれてることを意味しているのである。

このような意味での△理想の女性V、それは、当時の有島の言葉をもってすれば、△生きてゐる魂Vをもった女性ということになるのであろう。△余は生きてゐる魂と更に密接に接触したい。―人は己が魂と相触るゝ魂を必要とするものだ。V〔日記、同・3・12、原文英文〕という願いをもった有島にとって、座古愛子は、まさにその具現者であったということができるのである。

座古愛子の、いわば△生きてゐる魂Vとしての存在を支えているものは、いうまでもなく彼女のキリスト教信仰である。彼女は、回復不能の病人でありながら、あるいは、笹淵氏の指摘にもあるように、有島の愛した少女、瀬川末のような、不遇な生い立ちをもった者でありながら、そして、彼女自身、自らを△罪故にほろぶあや

うき我身V〔「我主をたのまん」〕であることを痛切に実感しながら、なお、△ひたすら救ひの 新主をぞたのV〔ク〕み、△基督に効V〔基督に効はん〕う生活を願いつつ、愛と奉仕の生活を全うしたのであって、大方の座古愛子評も、この点において一致しているのである。たとえば、序文として付されている内村鑑三などの評言も、その一例である。^(註16)そして、彼女が、信仰者としての生涯を全うしたことは、『伏屋の曙』に続く一連の著作をみて明らかであるし、養女酒井意志氏の証言もある。^(註18)

このような存在に対して、大方の見方が、いわゆる伝道者、あるいは宗教詩人とするのは当然のことであるが、有島は、かならずしもそのようには見えないのである。

彼女の宗教上の態度が、甚だ消極的なことを知つてゐる。〔日記、同・4・7、原文英文〕

原文の英文では、△消極的Vというところには△negativeVという言葉が用いられているが、常識的な意味で、彼女の信仰を、このような言葉で表わすのは、まず、適当ではあるまいと思われる。にもかかわらず、有島が、彼女をして△negativeVと称したのは、いったい何故であらう。

おそらく、有島の、このような座古愛子観の中には、彼の根元的な願いをこめた見方が託されているのであろう。この時期の有島は△ある固定した観念から出発し、それをある文学的なイメージや象徴によって顕証してふたたびその観念に立ちもどる―宗教詩Vでは^(註19)

なく、△創像力によって、われわれの生にとつて最も重要で決定的意味をもつならかの認識や信念に到達し、またそれを確立しようもの―▽、すなわち△詩的宗教▽ともいへべきものの実現の可能性を、座古愛子の詩的存在性に託していたのではないかと思われるのである。その思いが、△理想の様に美しいものと、我々の夢想していた現実の醜くさを嫌つて、余の心の交りを病人の内に求めるのは余としては全く自然の成行だと云ひ得るに違ひない。▽〔同、3・27〕という、いわば魂の健全性を、生きている魂への期待というかたちにおいて表わしているのではないであらうか。

彼の強壯さは、余の心をひたすら驚かし、捕へる。あれほど健康にしかもあれほど詩的にあり得るものがあらうか。彼こそ確かに来るべき時代の喜ばしき黎明である。〔同、3・11〕

という、有島のホイットマンへの讃辭にみられる、健全なる魂、生きている魂との合致への期待を、座古愛子に求めるということは、彼女に、△二度生れの子▽つまり、△生の不安や苦悩や罪の意識やから回心して入信する者▽から、△一度生れの子▽つまり、△人生は善であるという感じに熱情的に身を託しきる―最初から神的なものと合致した宗教をもっている、また本質的に世界のたのしい一面を強調して、その暗い面を思はずらうことを禁じる▽者へと本質的な転換を求めていることにもなる。こうなつてくると、それは、もはや、座古愛子への期待というよりは、彼女に仮託された有島の、根源的な願望の顕現であると云つた方がよいようである。

有島武郎研究 ―「詩への逸脱」をめぐる―

このような期待に、現実に応えうるものは、有島の理解においては△大なる魂▽との本質的一致を可能にしたと思われているホイットマン以外にはない、というのが、この時期の有島の実状でもあらう。このところに、有島の、ホイットマンへの傾倒の、内的必然性を見ることができるのであるが、座古愛子の信仰の一面としての魂の健全性と、ホイットマンの△大なる魂▽への一種の信仰の中にか、あるいは、ホイットマンの△大なる魂▽への一種の信仰の中に先にくれた△逆説▽を見るのは、ホイットマン詩の理解のための一つの問題点といふことができるのである。

註

- 1・2 有島武郎論―盲目状況認識をめぐる―「評言と構想」第三号 昭50・10
- 3 「自然観にみられるキリスト教受容と定着の考察」
- 4 日記にも、いくつかの習作の記録がみられるが、「遠友夜学校校歌」〔明31〕、「五日集」〔同34・11〕などの詩作の他に、自選詩華集『金声集』の編纂の事実〔日記、同36・3・5〕などがこの時期の具体的な詩作・詩との関わりを示している。
- 5 「有島武郎の芸術と生涯」大15・6 弘文社
- 6 留学前後の有島武郎(上)「文学」昭39・10
- 7 「日本現代文学全集」月報25 昭37・10
- 8 有島武郎伝・3 楡の樹蔭―札幌農学校時代―「文芸」昭38・11
- 9 「教会評論」第六十八号 明31・9。なお、武三郎の略歴につ

いては、いずれも「序文」によっているものと思われる。

10 「フレンド精神病院における看護夫生活の意義の考察」

11 有島武郎と用無遺稿 「文学・語学」第30号 昭38・12

12 著作集第一輯「惜みなく愛は奪ふ」の「書後」で、有島は、

武三郎および「用無遺稿」にふれているが、「白樺」に掲載された未定稿の付記は、定稿として著作集第十輯「三部曲」に収録の際脱落している。

13 「用無遺稿」についてふれているものには、その他に、(1)湖沢

龍吉「永野用無」―立教の詩人(7)―「立教」昭38・12、(2)

笹淵友一「有島武郎とキリスト教」をめぐる諸問題、の注2・3

「明治大正文学の分析」明治書院刊所収 昭45・11」などがあ

る。

14 岡庭昇 虚構の逆説 「フォークナー・吊された人間の夢」筑

摩書房刊所収 昭50・9

15 註13の(2)に同じ。なお、座古愛子の略歴についてはこの註に略

記されている。

16 序以外に、柏木義田の「坐古愛子嬢を訪ふ」(「上毛教会月報

」明35・4)、「坐古愛子の実歴」(「同、同・6)」、長加部寅吉

の「病床隨筆」(「同、同・7)」などがある。なお詩人としての座

古については、日夏耿之介が「日本現代詩大系」第三卷(昭25・

11)においてとりあげている。

17 その他の著書には、「聖翼の蔭」(「大2・4)」、「父」(「同8

・11)、「微光」(「同14・8)」、「闇より光へ」(「昭6・6)」、

「続々伏屋の曙」(「同10・12)、「小説不知火」(「同11・5)な

どがある。

18 筆者あて書簡(「昭47・11・17)」、なお、この書簡によると、座

古愛子は、昭和二十年三月十日午前一時、東須磨にて永眠、六十

八才であったということである。

19・20・21・22 藤原定 「詩の宇宙」『詩の宇宙―重吉 元吉

賢治』皆美社刊所収 昭47・9

* * *

註3・10は、拙著「有島武郎の文学」(昭49・6、桜楓社刊)所

収論文である。

付記 現在、日本近代文学館所蔵の有島所持本「用無遺稿」の閲読に

ついては、瀬沼茂樹先生のご配慮を賜りました。記して感謝を申

し上げます。